

錦帯橋再建記念碑

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館
江口知秀
Tomohide Eguchi

吉 川広嘉が「会心の奇処」を得てから九年後の延宝元（一六七三）年、ついに錦帯橋は完成した。『西湖遊覧志』の絵図のごとく、小島に見立てた四つの石積み橋台を錦川に築き、流れの緩やかな両岸側が普通の桁橋で、急流部の中央三径間は刎橋を応用した木造アーチという世界に類をみない独創的な姿となった。創案から着工までに年月を費やしているのは、広嘉のアイデアを実現するための構造や工法の研究などに時間をかけたためであろうか。たしかに、寛文十三（一六七三）年六月二十八日から延宝元年十月一日までのわずか三カ月という施工期間からも、工事が綿密な計画に裏打ちされたものであることが伺える。

こうして誕生した錦帯橋は、創建の翌年に流失の憂き目をみたものの、その後すぐ橋台などが改良され、同年中に再建された。以後、昭和二十五年九月十四日のキジア台風による洪水で流失するまで、吉川家の悲願のとおり、実に二七六年間も流されることはなかった。

落橋後、岩国市では緊急臨時市議会が開かれ、再建に向けた運動が始まった。ちょうどその頃、毎日新聞が日本全国観光地百選の選定投票を開始しており、岩国市では錦帯橋を第一位に当選させるべく活

動を続けていたが、その矢先の落橋であったため、投票数は伸び悩んでしまった。しかし、当時の岩国市長津田弥吉氏は、初志貫徹することが再建への近道だと激励し、投票用はがきの購入に数十万円を投入していたが、さらに百万円をつぎ込み、みずから陣頭指揮にたって徹夜で郵送手続きを行うなど奮闘した。こうして錦帯橋は、投票数一三万八、〇〇〇票を獲得し、「建造物の部」第一位にみごと輝いた。ちなみに第二位の広島県瀬戸田町の耕三寺とは、約一〇万票の差だったというから、当時のはがき代が五円であったことを考えれば、岩国市の追加投票分二〇万票が功を奏したといえるだろう。

このような努力が実を結び、錦帯橋の再建工事は昭和二十六年二月二十二日に起工式を迎え、昭和二十八年三月三十一日に竣工した。『名勝錦帯橋再建記』を見ると、再建を記念して昭和二十七年十二月二十九日に錦帯橋の左岸緑地左端付近に再建記念碑が建てられたとある。小型の自然石で作られたらしく、あまり目立つ碑ではないだろうと予想していたが、すでに左岸には緑地もなく、記念碑は行方不明となっていた。現地では数人にたずねても埒が明かなかったが、最後の最後に訪れた岩国徴古館の若い学芸員が、所管局に問い合わせしてくれたので、よう

やく所在を知ることができた。なんのことはなく、何度か通り過ぎた錦帯橋左岸の渡橋券売り場の横に移設されているという。

さっそく、教えられた場所に行ってはみたが、やはり一度は通り過ぎてしまったほど、再建記念碑は小さな碑だった。車止めを少し大きくした程度なので、これでは誰も気づかないだろうが、当時の岩国市長久能寅夫氏の意向で、錦帯橋周辺の簡素な環境を損なわないように配慮したのだという。



錦帯橋再建記念碑

[交通] 錦帯橋左岸の渡橋券売り場の横

※ 碑文の全文は日建連HPに掲載しています。